

自然の中で

野外教育情報



2018 第 **7** 号 「はじまり はじまり」

◆今号の特集◆

平成30年2月15日発行

公益財団法人 日本教育科学研究所

私の野外教育の^{もと}元

土井 浩信

(日本教育科学研究所理事・淑徳大学名誉教授)

正直に白状しますと、私は、けっこう高所恐怖症です。吊り橋や剣先尾根などでは、絶対に大丈夫だと言いついて聞かせて、出来るだけ早く渡っていきます。狭く尖った岩山のとっぺんに長く留まって周囲の景観に感嘆する余裕はありません。ロッククライミングやハイエLEMENTのPAで学生に模範を見せる時には、恐怖心を押さえ込んで必死に笑顔を作っていました。パラグライダーでは、斜面を駆け下りて体が空中高く舞い上がった一瞬の歓喜を恐怖心が吹き飛ばしていました。

昔、赤ん坊だった私は、高い所から落ちて何かに足が挟まり足の指を痛めたそうです。左足の親指の爪は縦に割れ今もそのままです。もちろん全く記憶には無いのですが、その変形した足の爪を見る度に、得体の知れない恐怖心が蘇って私の足をすくませてきたのかもしれない。

小中学生の頃、私の週末は畑仕事でした。土を耕し、家の便所の臭い肥を汲み取って畝に撒き、雑草を抜き取り、枯れ葉を集めて堆肥を作って畝にすき込み、およそ300坪ほどの広い菜園で色んな野菜を作っていました。決して楽しい週末では無かったのですが、黒くふっくらとした温かい畑の土の感触が、今でも私の指先に蘇ってきます。そして子ども心にも、豊かに実った野菜の収穫は格別の喜びでもありました。

高所恐怖症ゆえに私は冒険的な自然体験にのめり込むことは殆どなく、農作業の記憶ゆえに比較的優しい自然へといつも私の視線は向いていたように思います。ゆっくりと自然に触れて、自然を深く見つめることが私のスタイルでした。いつも身近な生活の延長に、私の野外活動・野外教育があったように思うのです。

バイタリティーあふれたハードな自然体験活動を通して野外教育を営む友人に対し、私は無条件で尊敬の念を覚えています。そして自分の野外活動の幅の狭さを恥じてきたのですが、もしかしたら、私には私だからこそ見える自然の世界があるのかもしれないと思うようになりました。そうだ、人には人それぞれのオリジナルな元が有り、その元を軸にして自分ゆえの世界を広げて深めていけば良いのだと、そう思えるようになったのです。思い出が元になり、更なる思い出がその元を膨らませ、人はその人らしく育っていくのかもしれない。

私学の新生プログラム——

▲ アドミッションポリシーに寄り添う

山路 歩

私はアドベンチャー教育をベースにした体験教育活動のファシリテーターをしています。

毎年4月は、首都圏の私立中学校（以下私学）を中心に、新生生の校外実習に関わる機会が多いです。私学には創立者がいて、各学校のアドミッションポリシー（建学の理念）のもと、教育活動が行われています。

「MEN FOR OTHERS, WITH OTHERS」「25歳の男づくり」「世界に信頼される人間」

これらは今年関わった各学校それぞれのアドミッションポリシーです。どういう意味？と興味湧きませんか？ 私はワクワクします。

私学の先生は、自身の学校のアドミッションポリシーをとっても大切にしています。また、多くの学校が、新生生の校外実習の目的を、出会いや仲間作りだけに置かず、アドミッションポリシーを、体験的な学びを通じて伝え、学校の大切な価値観を共有する場として設定しています。ですから、我々ファシリテーターも学校のアドミッションポリシーに丁寧に寄り添い、先生と対話します。

ここ数年、このアドミッションポリシーを軸にした、先生とのやりとりを、どれだけ率直かつ深く出来るかが、プログラムの豊かさに繋がっていると実感しています。

「うちのアドミッションポリシーは、当たり前を疑える自分であること。なので、この新生プログラムは、アンラーニング（学びほぐし）の場であってほしい」

これは、ある学校の先生が私に話した言葉です。最初は「？」でしたが、気を取り直し、問いを立て、勇気を持って多くの事を伺いました。生徒の多くが、小学生時代に塾に通い、中学受験を経て、今に至っていること。それぞれの場で、様々な学び方や人との関わり方に出会い「今の価値観」に至っていること。そんな彼らが、今一度、自分について立ち止まって考えてみたり、自分が「当た



デブリーフィング（ふり返り）のようす

り前」にしている学び方を一度疑ってみたりしながら、改めて自分自身をアンラーニング（学びほぐし）する。そんな場を創ってほしいとのことでした。その先生とは、「効果的なフィードバックについて」「競争ではなく、学び合うことの意味」など、話が深まりました。

最終的には、「生徒達に、率直なフィードバックをどんどん渡してほしい」と言われました。このようなやりとりができる、私はファシリテーターとして多くのチャレンジができるようになります。前提となる目的が明確化され、フィードバックや介入に迷いがなくなり、積極的になれる。実際、夜のミーティングで、「介入が少ないよ。もっと介入して」と言われました。

「生徒達の学びが中心」であることを根っこにしつつ、その手前で先生と率直なやりとりをすることが新生プログラムづくりに欠かせない準備だと考えます。また、先生とのやりとりは、私自身がフィードバックを貰える機会にもなります。

「介入のタイミングは計るものじゃない、創るものだよ！」これも、ある先生から頂いた大切な言葉です。

● 山路 歩【やまじ あゆむ】
（NPO法人 体験学習研究会 代表理事）

1977年神奈川県生まれ。アドベンチャー教育を根っこにした教育キャンプ・企業研修のプロデュースを続けている。現在 JAPAN OUTDOOR LEADERS AWARD2018 運営委員。審査にルーブリック評価を導入し、その作成や運営に携わっている。

はじめてのパートナー



秋谷 瑠里

2017年8月、私は発達障がいのある小学生～高校生を対象とした3泊4日で行われるキャンプに、4日間キャンパーに1対1でつくパートナーという立場で初めて参加しました。

キャンパーとパートナーのペア4～5組で1グループとし、各グループにアドバイザーがつき、全5グループで様々な活動を行いました。

このキャンプには、何度も参加している子が多く、私の担当のキャンパーは今回で5回目の参加でした。

毎年このキャンプを楽しみにしていると聞き、キャンパーを楽しませてあげることができるのだろうか、キャンパーは私のことを信頼してくれる



ゼミナール活動のようす

のだろうかなど不安ばかりでした。

しかし、キャンプが始まるとそんな不安は一気に吹き飛びました。それは、キャンプ場探検やカレー作り、川遊び、クラフトなど様々な活動をキャンパーとともに行ない、活動の中でキャンパーの元気に圧倒されながらも、キャンパーの笑顔や一生懸命に取り組む姿をたくさん見ることができたからです。

一緒に活動をする中でキャンパーの楽しむ姿、たくさんの笑顔が私の笑顔の源となりました。特に川遊びは、キャンパーがこのキャンプのプログラムで一番楽しみにしていたことであり、高い岩から川への飛び込みを何回も何回も行い、笑顔で

楽しんでいました。キャンパーが「一緒にやろう」と私の手を引いてくれ、一緒に飛び込みました。

このキャンプでは、様々なプログラムでキャンパーと一緒に活動しましたが、その中でも、一緒に飛び込みをしたのは、一番嬉しく、楽しかった思い出です。

4日間のキャンプを通し、キャンパーとだけでなく、グループ内で楽しさやできなかったことができるようになった喜びなど、様々な感情を分かち合うことで、楽しさや喜びを何十倍にも感じることができました。

また、他にも大きな学びを得ることができました。1つ目は、発達障がいの子どもたちに対してのコミュニケーションの取り方や、活動の見通しをもたせることなど、発達障がいの子どもたちへの関わり方です。2つ目は、把握しておくべきことや子どもたちの様子などの共有です。

これらの学びは、特に非日常の環境で過ごすキャンプだからこそ、重要視されるものであると思います。

今後もより多くのキャンプに参加し、より多くの学びを得て、将来に活かせるようにしていきたいです。

● 秋谷 瑠里 [あきや り]

順天堂大学 スポーツ健康科学部 3年

千葉県出身。大学2年次に参加した大学のキャンプ実習で野外活動に興味を持った。現在は、野外教育ゼミナールで野外活動について学びながら、特別支援学校の教員を目指している。



はじまり はじまり



枝村 組子

栄光学園は神奈川県にある中高一貫のカトリックの男子校です。全国有数の進学校として知られていますが、その学びは体験を重視し、1学年180名の生徒たちの成長に丁寧に寄り添う学校です。

春4月、期待と不安で胸いっぱいの新入生は、入学後すぐ中伊豆で行われるオリエンテーションキャンプに行きます。これから6年間の学びを共にする仲間たちと、プロジェクトアドベンチャーという体験活動を行います。

生徒たちは厳しい中学受験を乗り越えてきてはいますが、ごく普通の12歳の少年たちです。春の光が美しいグラウンドで楽しそうな歓声をあげながら、時に真剣な面差しで仲間と協力することを学び、1泊2日のキャンプからの帰途につきます。



2017年オリエンテーションキャンプの一場面

さて、実はここからが栄光学園の教育のはじまりです。体験を重視する本校では、何か体験するたびに感情を伴った振り返りを行い、そこで得られる言葉を大切にします。それは一見まわり道でエネルギーが悪そうですが、本当に人が成長することとはそういうことだと考えます。

毎年思いますが、ファシリテーターのみなさんは生徒たちひとりひとりに対して、成長のキーとなるような実に良い言葉を残してくれます。

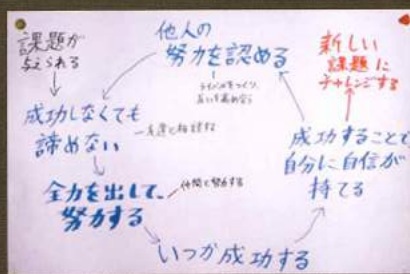
私たち教員は学校に戻った生徒たちがこの出会いをただの思い出で終わらせることがないように、学校の授業で振り返りの時間を確保します。

項目は3つ。「キャンプで得られたことを、

- ① 今後の学校生活にどのように生かすか
- ② 授業・学習にどのように生かすか
- ③ これから頑張りたいこと」

一緒に活動した班の仲間とキャンプを思い出しながら、項目ごとにまとめ、それを色画用紙に書きます。そして、12班すべての色画用紙を廊下に掲示します。たとえば、こんな言葉が廊下に並びます。「友だち同士で教え合う」「失敗こそ成長のチャンス」「まずはチャレンジ」「人の気持ちを考えて行動する」「積極的に声をかけて仲間に入れる」「自分の意見をもつ」「全力」「みんなが楽しめるようにする」

よく見る月並みな言葉といえばそうですが、これらの言葉は仲間とのキャンプ体験とファシリテーターとの出会いによって新しいものになっています。体験で新しくなった言葉は廊下に並び、今度は学園生活のさまざまな場面で生徒たちの背中を後押しし導いていきます。キャンプ体験が日常の中で少しずつ深まり、心の芯までしみ入ります。



中学1年生諸君、いよいよ栄光学園の学びのはじまりです。栄光では実際の体験や人との出会いを大切にしながらゆっくりと成長していきます。私たち教員は、君たちひとりひとりの学びを大切に支援していきますよ。はじまりはじまり～

● 枝村 組子 [えだむら くみこ]

栄光学園中学高等学校 数学科教諭

神奈川県出身。

始まってしまいました



八木 信行

1986年の秋、会社を辞め、野外計画という会社を設立し、3年目ぐらいで私も合流しました。そこで、ある人の紹介で、福島県裏磐梯の小野川湖畔の土地を紹介されました。野外計画は当初から、教育組織キャンプ場を整備しようと無謀にも設立されました。その中で、小野川湖の場所を見に行った時のことは今でも鮮明に覚えています。

湖と2つの川に囲まれた平坦な土地、豊富な飲料に適した湧水、両端にある小高い山、標高800m、多様性のある動植物、ブナ、ナラ、カラマツの森林と、組織キャンプをするためにはすべてのお膳立てが揃っている場所で、下見に行ったスタッフ全員が感激したのが思い出されます。また、湖は人気の高いカヌー・カヤックなどの水上プログラムに適した湖でした。

それまでは自分たちでキャンプ場を持つという発想はあまりなく、整備の企画、手伝いが出来ればという程度で考えていたところ、あまりにいい場所だったので、キャンプ場をやろうということになりました。

当時は民間で教育キャンプ場をやっているところはあまりなく、YMCA、ボーイスカウトなどが主なものでした。先進事例や資料もなく、お金もない状態で、アメリカの資料や写真を参考にし、実際アメリカにも行き、民間の教育キャンプ場を見て回り、施設作りに反映しようと思いました。

実際の工事が始まり、一部、重機が入り整地をしてもらった以外は、チェーンソーで木を切り、車のウィンチで木を集め、下草を刈り払い機で刈り、土地を整備して、切ったカラマツを柱にして、コンパネを曳き、デッキを作り、その上に特注の大型テントを張り、中にはベッドを入れ、ビニール製のマットと毛布を廃業したロッジのお古をいただき、テントキャビンをつくりました。

トイレはやはり伐採したカラマツをフレームにした小屋に、地面に穴を掘ったのがトイレでした。



台所も同じくカラマツフレームにトタンの波板の屋根の下に貰ってきたシンクを設置しました。

水は滝の反対側にある、活断層から湧き出ている湧水を沢沿いにパイプを設置して約700m引いてきて、ドラム缶で作った調整タンクを経由して使いました。当然お湯は出ませんので、湖で体を洗うか、蛇口の水でシャンプーです。3日に1回はホテルのお風呂に入浴に行きました。

電気も当然無く、1年目はコールマンのランタンだけ、2年目以降3年ほどは発電機を借りてきて、夜間9時ごろまで照明に使いました。この環境の中で、1年目から4泊5日の子どもたちのキャンプを行いました。これが今も続いているネイティブランドキャンプで、現在は7泊8日です。

こうして振り返ると、まるで原野を開拓して農耕地にした農家と一緒です。しかし、あまり辛いということではなく、作り上げる楽しさ、達成感が得られたと言えます。

この原動力は、若さとやりたいという熱意と多くの人々の助けがあった結果だったと思います。本来、キャンプをする原点の一つは、なるべく自分たちで作るということだと思います。

● 八木 信行【やぎ のぶゆき】

株式会社野外計画 代表取締役

1950年生まれ、新潟県出身。大学時代はYMCAでキャンプ指導者を経験。その後10年間は民間会社に勤務。野外計画では、教育キャンプ場の企画、施工、運営及び地方地域振興に関わる。2011年から5年間、震災からの東北復興の為に「みどりの東北元気キャンプ」の開催に関わる。「小野川湖レイクショア野外活動センター」責任者。

ゆらぎによる学びのトランジション

はじまり はじまり



鎌田 学

上司から「新しい仕事があるけど、君やってみないか」と声をかけられたら、あなたはどのように思いますか。「今の私にその仕事ができるだろうか?」「どうすれば、その仕事ができるだろうか?」

新しいことに立ち止まってしまう人と、挑戦してみようと思う人とがいます。それは変化を恐れる人か、変化を楽しむ人かの違いであります。マインドの違いは仕事ができるだけではなく、仕事経験から成長できるかにも関わってきます。

人は経験から学んでいきます。社会に出ると仕事経験から学んでいきます。社会では経験から学ぶ力を身に付けなければなりません。そして、組織は持続的に成長していくことを求めています。継続的に社会に貢献できる人材を育てることが、組織を成長させていくこととなります。組織は持続的に学ぶ人を求めています。

仕事経験から学ぶためには、学び方のトランジション（移行）が必要です。学校教育では知識を教える人（先生）と教わる人（学生）がいます。これは受身的な学び方です。社会では自らが学び取る能動的な学び方に変化する必要があります。

これが学び方を見つめ直すこと、学びほぐし（アンラーニング）です。学校で学んだやり方や考え、見かたを見直して、違うやり方や考え、見かたがあるかをメタ認知することです。

学校を卒業して社会という新しい世界に踏み出したときこそ、学びのトランジションが求められています。そして学びほぐしのためには、自分の中にゆらぎを起こしていくことが必要だと考えます。

ゆらぎとは揺らぐことから来ています。そして1/f ゆらぎとは、周波数fに反比例する波長です。これは人の心臓の鼓動や音楽のリズム、自然の木目模様などの現象に1/f波長があり、ゆらぎ（ずれ）があります。木の葉が揺れたり、川のせせらぎや波の動きなどが心を落ち着かせるのも、人の中にあるゆらぎと自然のゆらぎが同調したからだと言

われています。ゆらぎを起こしていくには、変化を楽しむチャレンジすることです。チャレンジは、まさにアドベンチャーです。

アドベンチャーにどんなイメージを持っていますか。野外での危険な体験、サバイバルといった冒険的なイメージを持たれている人も多いと思います。アドベンチャー教育におけるアドベンチャーとは、物事の取り組み方、やり方、プロセスであり、単に活動や体験だけに焦点を当ててはいません。これは危険と隣り合わせの鮮烈な印象を残す体験行為や体験そのものだけではなく、体験過程でどう取り組んでいったのかに注目しています。アドベンチャーとは魅力があり、難しく、それゆえ考え方を拓ける効果があると考えられます。

社会での仕事経験はアドベンチャーそのものです。学びにとってのゆらぎとは、物事に対してドキドキワクワクする心の揺れや考え方のずれや違いを感じる状態のことをいいます。アドベンチャー活動は、人の中にゆらぎを起こしやすく、学びほぐしの機会を創り出します。

社会に踏み出したのはじまりだからこそ、チャレンジを楽しんでゆらぎを起こし、学びほぐしによって自分の学び方を身につける必要があると思います。

社会が必要とする経験から学ぶ力とは、「自ら学び考え判断し、他者と共同して実践していく力」であり、そして社会に貢献できる人材へと成長していくことです。

● 鎌田 学 [かまた まなぶ]

一般社団法人まなび創造アカデミー 代表理事

中央大学大学院戦略経営研究科戦略経営専攻修了。経営修士(MBA)。プロジェクトアドベンチャー・ジャパンのトレーナーとして従事し、その後、衆議院議員公設秘書に就く。

現在はまなびのデザインによる企業組織やスポーツチームのチーム開発、ナレッジマネジメントの場をデザインしている。

専門家だからこそできる

▲「本物の体験」を

黛 若葉

食事の際、なぜ「いただきます」から始まり、「ごちそうさま」で終わるのか。それは「命」をいただいて生かされているからである。食べるという行為の本質的なことが、忘れられがちになっている。切り身で泳ぐ魚はいないし、牛や豚、鶏や卵、搾りたての乳も、本来「命」は全てあたたかい。より良いものをと、手間暇かけて作った食べ物はコストがかかる。食べ物の価格には、理由があるのだ。しかし、大量生産、大量消費の経済社会の中で育った子どもたちが大人になった時に、その理由が理解できるのだろうか。

何とかしなければと、昨年7月に「まえばし農学舎」を立ち上げた。私以外は皆職人である。魚養殖家、ハム職人、酪農家兼チーズ職人、養鶏家、納豆職人、野菜農家。仲間の食べ物には、たくさんの思いが込められている。私たちには「伝えたいこと」がたくさんある。

子どもたちに、農家のリアルな仕事を伝えようと「あかぎキッズファーム」をスタートした。土作り、播種、苗の植え付け、収穫、畑の整備を、一年かけて子どもたちが行うプログラムだ。

「育てたい野菜」と「嫌いだけど食べられるようになりたい野菜」を中心に育てている。収穫した野菜を皆で調理して食べた時、ナス嫌いの子が恐る恐るナスを口に運んでいた。私も驚いたが、それを見ていた保護者の方がもっと驚いたに違いない。重い鋤を使って土を耕し、暑い中、顔を真っ赤にして行った草むしり、何か月もナスと向き合ってきた。その思いが「食べてみよう」と思わせたのだろう。

前橋の中心商店街で行われた11月のマルシェでは、子どもたちが育てた野菜の販売を行った。農家に教わりながら、収穫、袋詰め、値付け、売り場づくりまで自分たちで行う。売る時に必要なもの、接客の言葉も皆で考えた。

子どもたちには「あつという間に売れるだろう」

という気持ちがあったと思う。現実はそのそんなに甘くない。なかなか売れない。そのうちに「いくつかの野菜を組み合わせでサラダセットにしたら」「この野菜、鍋にしたら美味しかったから鍋セットも作ろうよ」「試食も出そうよ」と工夫し始めた。試食を作って大きな声で野菜を勧める。自主的に野菜を販売する子どもたちの姿に「成長」を実感した。必死だった子どもたちの姿に、見守っていた保護者もいつの間にか、巻き込まれていた。



一生懸命育てた野菜を自分たちで売ってみる

農家の仕事を学んでたった7カ月だが、私たちが伝えたい「本物の体験」は着実に、子どもたち、保護者たちにも伝わっている。きっとこれからは、食べ物が食卓に運ばれるまでの過程を想像し、本当の価値を理解するようになるだろう。

この団体での私の役割は、仲間の得意分野や地域の特徴を活かしながら、プログラムを組み立てることである。「食育」だけでなく、自分が得意とする「自然体験活動」等、様々な要素を取り入れながら、専門家集団だからできる活動を展開していきたい。

● 黛 若葉 [まゆすみ わかば]
NPO法人まえばし農学舎 事務局長

1986年群馬県生まれ。自然学校の代表である父の影響で幼い頃からキャンプばかりの日々を過ごす。大学卒業後は広告代理店の営業として働き、その後、国立赤城青少年交流の家の職員を経て現職。



子どもにとって必要な“経験”

講師として講習会に参加して

福 富 優

「大人が子どもたちに考え方を強いるのは間違っている。しかし、経験を強いるのは義務である。」これは、ドイツの教育者クルト・ハーンの言葉です。はじめてこの言葉に触れたとき、大きな感銘を受けてすぐにメモをとったことを今でも覚えています。

さて、最近の子どもの成育環境は、かつてのそれとは大きく異なるようです。三間（時間・空間・仲間）の減少というフレーズがよく聞かれるようになりましたが、それとともに、現代を生きる子どもは多くの能力を獲得する機会も減少していることと思います。

私が子どもの頃に当たり前のように遊んでいた近所の池には現在、「よい子はここで遊ばない」という看板が立てられています。私自身が子どものときには考えもしませんでした。今思えば、池というフィールドで多くの仲間と群がって遊ぶことを通して、社会性や協調性、忍耐力、課題解決力、コミュニケーション能力など、実に多くの諸能力を自然発生的に獲得することができました。過去に大きな事故でも起きたのかもしれませんが、現在その看板を見て残念に思っているのは私だけではないと思います。

近年は通勤時間帯に小学校の近くを車で通りかかると、必ずと言っていいほど地域の方が横断歩道に立ち、子どもが安全に道路を渡れるようにと、そこに差し掛かった車を一時停止させている光景に出会います。しかしながら、明らかに高学年とみられる子どもがそれのお世話になっている様子を見ると、違和感を覚えます。低学年ならまだしも、高学年の子どもが接近してくる車に気づかずに道路に飛び出そうとしているのです。地域の方の熱心な取り組みが、子どもの適正な成長を妨げている気がするのです。

池での遊びにしても登下校中の道路にしても、そこで大きな事故が起こったり、場合によっては尊い命が失われたりすることは、決してあってはな

らないことです。しかし、子どもにとっての危険を排除することに目を向けるあまり、必要な“経験”すら排除してしまっていることが往々にしてあります。大人は子どもから貴重な“経験”を奪うことをするのであれば、それを補う機会を設ける義務もあるのではないのでしょうか。

私は、幼児や小学生を対象としたキャンプの指導をすることがよくあります。そんなときに決まって頭に浮かんでくるのが、前述したクルト・ハーンという言葉です。キャンプ中に子どもたちが何をどう感じるかまで強いることはできませんが、現代の子どもにとって失われている様々な“経験”を、大人によって意図的・計画的に提供するチャンスだと捉えています。キャンプに参加することで、心を伴った大きな学びがあってくれたら嬉しく思います。

昨年10月に国立乗鞍青少年交流の家で行われたアウトドアゲーム指導法講習会では、私は講師として関わらせていただく一方で、私の教え子も大勢参加させていただきました。20歳にもなった大学生が、ハンティングゲームで「ワン、ワンッ！」と大声で吠えながら、笑顔で草原を駆け回っている姿が印象的でした。彼らにとってもまた、必要とする“経験”を補っていたのかもしれませんが。

子どもが成長するにあたって必要な“経験”は、山ほどあります。これからも子どもたちにとって必要な“経験”を考えながら、自然体験活動を推進していきたいと思います。

● 福 富 優（ふくとみ ゆう）

至学館大学短期大学部 助教

信州大学大学院教育学研究科修了。

独立行政法人国立山青青少年自然の家勤務を経て、平成28年より現職。





アウトドアゲーム指導法講習会

長野県小諸市で「1日コース」を開催

報告：加々美 貴代

夏の野外活動シーズンに実践してもらいたい思いがあり、6月のこの時期に実施を決めました。6月と言えば梅雨の真ただ中、天気予報では雨の予報でしたが、雨に遭うことなく無事に開講できました。参加者の元気な笑い声が、森に響きわたる1日でした。



開催概要

日時：2017年6月25日(日) 9:00～16:00

会場：安藤百福記念自然体験指導者センター

参加者：10名(男性3名、女性7名。長野県内7名、新潟県・群馬県・山梨県各1名)

講師：加々美貴代、鍵水 愛

主催：公益財団法人日本教育科学研究所

共催：NPO法人やまぼうし自然学校

NPO法人信州アウトドアプロジェクト



活動内容

アイスブレイクゲームから始まりました。じゃんけんを使ったゲームや数集まり、血液型や誕生日、居住地別に分かれたり、誕生日で並んだり飽きることなく進んでいきます。最後は円になったところで「キャッチ」でドキドキ、記憶力を試されてちょっと緊張した「1週間自己紹介」で終わりました。

アクティビティとしては、全部で8つを体験して頂きました。午前中は課題解決型、自然体験型が主体の、「私は誰でしょう?」「一番星」「林間立木取り」「手と鼻で自然観察」の4つを実施しました。



カメレオンゲーム(作品づくり)

「林間立木取り」では真剣勝負の猛ダッシュ、息を切らしながらの30分でした。

昼食後は「モンタージュ」「ちょっとだけよ」「自然が教える1・2・3」「カメレオンゲーム」と、自然学習型、創造イメージ型が主体の4つを実施しました。

「モンタージュ」では本当に本人そっくりな作品が仕上がりました。初夏の森は秋と違い彩に欠けると思いきや、色々な素材を見つけ出していました。

「カメレオンゲーム」ではおとなの本気度全開の数々で、全力で楽しむことの大切さを再認識しました。



参加者の声

- 自然体験ゲームの中から、自然の学習ができて良かった。
- みなさんと交流(情報交換)ができて良かった。また参加したいです。
- 今日1日で五感がすごく刺激された感じがしました。
- 今後の保育に活かしていきたいと思います。
- 大人もワクワクしながらできたので、子どもたちもワクワクどきどきしながら自然の中で遊べるな～と現場で遊ぶのがとても楽しみです。
- 人数も丁度良く、みなさんと会話ができて、ゲームが楽しめた。
- IOREシートを自分で工夫し活用したいと思った。



講習会を終えて

長野県は「信州型やま保育」制度を導入しているためか、保育士の方の参加があり、新たなニーズと感じました。参加者の幅が広がることで、参加者同士の交流の幅が広がることを改めて実感しました。

IOREではどんな場所でも、どんな対象者にもマッチしたアクティビティが提供できます。受講生のみなさんには、野外活動のきっかけ作りとして大いに活用して欲しいと思います。

私自身も「IOREやっぱり好きだ」と実感した講習会でした。

● 加々美 貴代 [かがみ きよ]

NPO法人やまぼうし自然学校 代表理事



平成29年度アウトドアゲーム指導法講習会 乗鞍山麓の紅葉に囲まれて 「2泊3日コース」を開催

子どもたちが「自然に触れ親しみ、自然を知り、自然に学び、自然の不思議さや美しさなどに気づく」自然体験活動の楽しい指導方法を、パッケージド・プログラム(アイオレシート)による実習を通して学ぶ、指導者講習会(31回め)を、平成29年10月7日(土)～9日(月:祝)、岐阜県の国立乗鞍青少年交流の家で、文部科学省・日本キャンプ協会の後援で実施した。

参加者は1都1府12県から27名(男性15、女性12)。大学生のほか、社会教育や学校教育関係者、青少年健全育成等に携わる方など、10代～50代にわたった。

指導講師は、平野吉直(信州大学理事・副学長)、野口和行(慶應義塾大学体育研究所准教授)、鶴川高司(有限会社 掌 代表)、中丸信吾(順天堂大学助教)、加々美貴代(NPO法人やまぼうし自然学校代表理事)、福富 優(至学館大学短期大学部助教)の6氏。ほかに土井浩信(淑徳大学名誉教授)も特別参加。

10

講習第1日 10月7日(土)

開講式後、雨上がりのもみの木広場に移動し、まず加々美・福富講師の指導でアイスブレイクを行った。

次に、3グループに班分けして、6つの課題解決型ゲーム(アクティビティ)を各講師が指導した。

- ①「みんなで、ソーレ」(鶴川講師)
輪になり「ソーレ」の掛け声で、拍手を合わせる。
- ②「くじらの噴水」(平野講師)
ブルーシートの端を持ち、ボールを飛ばしキャッチ。
- ③「移り木」(加々美講師)
薪4本と中央に踏み石、8人が乗り、並び変わる。
- ④「宇宙ゴミ回収」(中丸講師)
ロボットアームの形になり、宇宙ゴミを拾う活動。
- ⑤「くっ(靴)つけよう」(野口講師)
片方の靴を脱いで他の靴を履き、左右同じに揃える。
- ⑥「エレクトリックフェンス」(福富講師)
腰の高さに張ったヒモに触れずに、乗り越える。

○ナイトゲーム「光の音さがし」(野口講師)
二人一組。夜の森の中で自然にはない人工音を探す。

講習第2日 10月8日(日)

ワークショップ形式による、3分野(自然体験・自然学習・創造イメージ)のアウトドアゲームを実習。

1. 自然学習型ゲーム (鶴川・加々美講師)

○「手と鼻で自然観察」

目隠しをし、案内役に誘導され、指定の植物を手や鼻を使って観察、紙に描き、実物と比較する活動。

○「食べ跡探偵団」

2グループ。虫などに食べられた跡のある葉を探し、それを食べた生き物をみんなで想像して描き発表。

2. 自然体験型ゲーム (中丸・野口講師)

○「ハンティングゲーム」

2グループの競争的活動。猟犬役とハンター役をきめ、エリア内で予めセットされた獲物のカードを探す。

○「いねむり爺さん」

2グループで活動。目隠しをして宝物の周りをかこみ、そっと近づいてくる者を聞き耳を立てて阻む。

○「ジャイアントモンタージュ」

2グループで活動。丘の下の広場に顔を自然物で作成り、丘の上から眺めて、誰の顔を当てさせる。

3. 創造イメージ型ゲーム (平野・福富講師)

○「森の気持ち探し」

2グループで活動。「気持ちカード」(うれしい、おこっている等々)にぴったりの自然物を探してくる。

○「マイクロな世界みーつけた!」

2グループで活動。想像力を働かせて、森に住むこびとの道具や乗り物、住まいなどを見つけたりする。

【ゲーム創作と情報交換会】

グループで集中して創作した。情報交換会は加々美・福富講師が司会、懇談・情報交換の場となった。

講習第3日 10月9日(月:祝)

創作ゲームの発表会を各20分の時間で発表した。

自然体験型は「重い思い出 タカラモノ」

自然学習型は「サウンドオブ再現ス」

課題解決型は「ミッションアウト・ポッシブル」

創造イメージ型は「びんぼ～ん 森の住人さん」

各講師のゲーム講評の後、閉講式を行って解散した。

平成30年度アウトドアゲーム指導法講習会予告

日にち:平成30年10月6日(土)～8日(月:祝)

場所:国立那須甲子青少年自然の家(福島県)



アウトドアゲーム指導法講習会

室戸青少年自然の家との共催で

「1泊2日コース」を開催 報告：中丸信吾

地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業として、昨年度に続き今年度も国立室戸青少年自然の家と連携して講習会を開催しました。

日程：2017年11月25日（土）～26日（日）

会場：国立室戸青少年自然の家（高知県室戸市）

講師：鶴川高司、野口和行、中丸信吾

当研究所のレギュラー講師が出張指導し、1泊2日に凝縮した新しい講習会の試み。ゲームの体験だけではなく、ゲームの創作までの展開。昨年のリピーターと新たな参加者で、今年も充実の講習会となりました。



活動内容

11月25日（1日目）

開講式の後、野口講師による「子どもたちの体験活動」に関する講義。子どもたちの自然体験の重要性についてエビデンスを示しながら、臨場感あふれる実践の話題を提供。講義とワークで自然体験の重要性を考えました。自然体験活動の教材のひとつとしてIORE Sheetが活躍することが紹介されました。

午後はフィールドに出て、まずは鶴川講師によるアイスブレイク、続いて課題解決型ゲーム「大脱走」「スカイツリー」「移り木」を体験しました。課題の達成に一喜一憂しながら、それぞれの課題解決のプロセスを体験していただきました。

午後の後半は、自然体験型→自然学習型→創造イメージ型とゲームを展開しました。

自然体験型ゲームは、野口講師による「ハンティングゲーム」。今回はIORE Sheetに載っている方法をアレンジした目隠しハンティングゲーム。対象やフィールドに合わせてゲームをアレンジすることもIORE Sheetを活用するポイントです。

自然学習型ゲームは、「林間ことば集め」を中丸講師が進行しました。森の中をミクロな視点で観察し、たくさんのことばが集まりました。

創造イメージ型ゲームは、鶴川講師による「スカイライトギャラリー」。室戸の海と夕日をバックに室戸ならではの作品が出来上がりました。

ナイトゲームは、「光の虫眼鏡」。真っ暗のフィー

ルドで、光に照らされた木々がまるで虫眼鏡を通して見ているかのようにフォーカスされ、参加者は夢中になって観察していました。

それぞれのゲームを体験した後は、いよいよ**ゲーム創作**。ゲーム創作のポイントを解説し、講師がチューターとして入り、ゲームづくりが始まりました。アイデアがたくさん出てきてまとめるのに苦労していましたが、最終的には満場一致のアイデアで決定。

11月26日（2日目）

朝食を食べた後は、創作ゲームの仕上げです。アイデアを形にするために、シミュレーションを通してゲーム進行やルールなど細かい点まで検討している様子。**ゲーム発表**では講師も一緒に創作ゲームを楽しみました。発表を終えても参加者の創作意欲は止まらず、創作ゲームシートを修正して提出していただきました。「ゲームを創る」楽しさが伝わったのではないのでしょうか。



活動の一場面（大脱走）

1泊2日の講習会でも、ゲーム体験からゲーム創作までの展開が可能です。全国どこへでも伺います。



● 中丸 信吾 [なかもる しんご]

順天堂大学スポーツ健康科学部 野外教育研究室助教
当財団の自然体験活動推進委員

編集委員って面白い!



鎌田 晴美

編集委員って面白い!これが私の「はじまり はじまり」です。

私は2017年4月から本誌の編集委員をしています。実はお引き受けした当初、私で役に立てるのか少し不安でした。日頃から野外での活動、仕事、趣味はあり、自然の中に身を置くことが大好きです。でも、それだけで良いのだろうか?野外に特化した専門家ではないのだけど…と思っていたのです。

ところが、そんな思いは編集委員の会議に参加して、すぐに消えました。なぜならば、自由な発想で、自分が経験してきた出来事、今まで自分が築いてきた様々な分野の方との繋がりなど、いろいろな視点で話し合うことが大切なのだ気付いたからです。

編集委員の会議では、次号のテーマ、執筆のお願いについて、様々な話題やアイデアが飛び交います。いくつも出た話題の中から、1つに絞り込み、共通のイメージを作り、担当ごとに役割を確認して会議は終わります。会議の最中もいろいろな話に花が咲き楽しい時間ですが、本当に面白いのはここからでした。

執筆依頼をする方と連絡を取り、お願いをし、お引受けいただき、原稿が届きます。そして、最初に原稿を読んだ時のインパクト、自分の中にビビビ…と軽く電気が走るような感覚です。自分たちが思い描いていたものとは違う角度からのアプローチに原稿を読み進めるほど、ワクワク度が上昇するのです。イメージしていたものを軽くか

わされた感じが、意表を突かれて面白さ変わるのかもしれませんが。私たちが想定していたフレームがいかに小さいものであったのか、気づかせてもらえるから面白いのかもしれませんが。これからは編集委員として、この面白さを感じられると思うとワクワクします。

テーマ「はじまり はじまり」は、物語(ストーリー)のはじまりをイメージさせてくれます。

どんな物語がはじまるのか?期待が膨らみワクワク、先が見えないことにドキドキ、楽しみと不安が入り混じり、なんとも言えない感情が「はじまり はじまり」から湧いてきます。

年のはじめ、年度のはじめ、季節のはじめ、進学、社会人スタート、初めてのスタッフ経験、施設開き、心機一転、思い起こせば…など、あらゆる場面や立場から「はじまり はじまり」をご紹介します。様々な人生経験が織りなす壮大な物語、人生という物語のほんのごく一部分、自分や自分たちが主役の物語です。

● 鎌田 晴美 [かまた はるみ]

一般社団法人まなび創造アカデミー 理事

プロジェクトアドベンチャージャパンのトレーナーとしてPA普及のために従事し、その後、サポートを必要とする子どもたち(障がいのある子どもとそのきょうだい、不登校状態にある子どもたち)、学校団体、精神疾患の方のケアなど、アドベンチャーアプローチによるプログラムを提供している。